61

損至について

中川　俊之
日本鍼灸研究会

脈診は中国伝統医学における最も重要な診断方法である．『素問』『霊枢』『難経』『傷寒論』『金匱要略』といった原典には様々な脈診が見え，三世紀末の『脈経』では，過去の脈診の集大成が試みられた．脈診を考える場合，以下の様な課題が存在する．①脈診部位，②脈の形状，③脈の表す病症状（脈証，あるいは病脈や死脈），④脈と四時，五蔵，病症状との関係，などである．今回，これらの脈診の中から，『難経』に見える損至の脈について検討を行った．

呼吸と脈の関係について

損至の脈は，呼吸と脈との関係性を基本とする．呼吸と脈の関係については，『傷寒論』平脈法第二に「呼吸者．脈之頭也.」，『霊枢』動輸第六十二に「経脈十二．而手太陰．足少陰陽明．独動不休．何也……其行也．以息往来」と見え，脈は呼吸によって身体を往来するものと規定される．呼吸数と脈の拍動数の関係については，『素問』平人気象論篇第十八に，「人一呼脈再動．一吸脈亦再動．呼吸定息．脈五動．閏以太息．命曰平人．平人者．不病也.」，『霊枢』五十営第十五に「故人一呼脈再動．気行三寸．一吸脈亦再動．気行三寸．呼吸定息．気行六寸.」，『霊枢』動輸第六十二に「故人一呼脈再動．一吸脈亦再動．呼吸不已．故動而不止.」とある．即ち一呼吸あたり四動を平脈（基準点）とする．

損至の脈法

『難経』十四難に「脈有損至．何謂也．然．至之脈．一呼再至曰平．三至曰離経．四至曰奪精．五至曰死．六至曰命絶．此至之脈也．何謂損．一呼一至曰離経．二呼一至曰奪精．三呼一至曰死．四呼一至曰命絶．此謂損之脈也．至脈従下上．損脈従上下也.」とある．「損」は『説文解字』手部に「損．減也.」，『玉篇』手部に「減少也」とある．「至」は『孟子』滕文公下「沛沢多而禽獣至」の趙岐の注に「衆也」とある．すなわち「損至」とは，減少と衆多の義であり，『難経』の文脈にあっては，一呼吸あたりの拍動数を生死（予後）の決定材料とする脈診法を意味する．すなわち前記の平脈を基準として，それより拍動が多いものを至脈，少ないものを損脈と称するのである．予後不良は，損至を問わず，離経→奪精→死（困）→命絶の 4 種の段階に分けられる．しかもその病状の程度により，これを病の深さとしての皮毛（肺），血脈（心），肌肉（脾），筋（肝），骨（腎）と対応させるという五行的認識が見られる．つまり損至の脈法とは，『難経』の中でしばしば見られる脈状の五行的認識の一種である．

損至と遅数について

『難経』九難には「数者府也．遅者蔵也．数則為熱．遅則為寒.」とあって，一見，損至の脈と類似するように見えるが，その内容は脈状と病態の陰陽的な対応関係を旨とするものであって，十四難の損至とは基本的にコンセプトが異なる．そもそも，後代とは異なり，『素問』『霊枢』『難経』段階では，脈状の早さについての対概念的記載は，「乍數乍疎」というように「遅数」よりむしろ「疎数」の方が多く，他に「遅速」「遅疾」といった脈状も散見する．しかもこれら脈の速さを示す脈状に，呼吸との関連を一定の形式で述べた記載は見られず，したがって，損至との積極的な関連も見いだせない．

結語

損至の病状分類に類似する例としては，『素問』平人気象論篇第十八に「人一呼脈一動．一吸脈一動．曰少気．人一呼脈三動．一吸脈三動而躁．人一呼脈四動以上曰死．脈絶不至曰死．乍疏乍数曰死.」の記載がある．また『素問』大奇論篇第四十八に「一息十至以上．是経気予不足也」とある．これらはいずれも五行的認識を背景にはしていないものの，こうした呼吸と拍動数との関係の認識の果てに，五行説との関連から損至の脈が成立したことは疑いが無い．しかし，『難経』の損至の脈は，その後，新たな展開を見せることなく，遅数が脈状の重要な基準となって以降は，全く歴史的な存在になってしまったのである．